相阿弥「大仙院室中襖絵」再考 ―足利将軍家の障壁画制作の系譜―

柴山 祥羽（早稲田大学）

京都・大徳寺大仙院蔵「瀟湘八景図」（襖二十面、紙本墨画）は、室町幕府の同朋・相阿弥筆と伝わる。先行研究においては、湿潤な筆致が足利将軍家伝来の牧谿筆「瀟湘八景図」（京都国立博物館蔵ほか）の影響を受けているとの指摘や、米法山水ややまと絵の表現が混交し和様化した水墨画としての位置づけがなされてきた。しかし、大仙院内の他室の障壁画との関係性も含む図様構成の総合的理解については、1989 年に小川裕充氏が陰陽五行説に基づく解釈を示した以外、十分に検討されていない。本発表では、室町幕府第六代将軍・足利義教（1394-1441）および第八代将軍・義政（1436-90）が命じた障壁画制作や、能阿弥・芸阿弥・相阿弥の三世代による会所飾付の事例を再検討し、本作が将軍家周辺における障壁画制作の系譜に位置づけられることを示す。加えて、同時代の朝鮮絵画との比較を通じ、両者に共通する復古的な北宋様式の受容を指摘する。

第一の論点として、永享九年（1437）に義教が後花園天皇を迎えた行幸飾付の記録『室町殿行幸御餝記』に注目する。同史料によれば、義教邸の新造会所「御十二間」には、北に夏珪、東西に牧谿の「瀟湘八景図」が飾られた。本発表では、この先例が大仙院室中襖絵の図様構成に継承されたことを明らかにする。また、新造会所「耕作間」の襖絵や、その原本である梁楷筆「耕織図巻」の図様が、大仙院礼間に描かれた伝狩野之信筆「四季耕作図」に継承されている点にも注目する。これらの事例を通じ、大仙院障壁画の図様構成には足利将軍邸からの強い影響が指摘できる。次に、『補庵京華別集』文明十五年（1483）条に目を転じると、義政の東山殿常御所襖絵にも「瀟湘八景図」と「耕作図」が描かれていたことが明らかとなる。このことから、義政邸の障壁画制作が、義教邸の先例を規範としたものであったことがうかがわれる。以上より、義政期以降の将軍家周辺では、先例を踏襲した障壁画制作の連鎖が見出され、大仙院障壁画もその掉尾に位置づけられるのである。

第二の論点として、大仙院室中襖絵に看取される、十五世紀末から十六世紀初頭における中国および朝鮮絵画との同時代性に注目する。本作の山水表現には、米芾から高克恭へ引き継がれた北宋江南山水画の影響が見られるが、この特徴は徐文宝らの款記を有する「雲山図」（大和文華館蔵）など、同時期の朝鮮絵画と共通する要素でもある。さらに、大仙院室中西面の前景から遠景へと展開する空間に四阿を配置する構成は、金玄成賛「瀟湘八景図屏風」（九州国立博物館蔵）や「瀟湘八景図屏風」（国立晋州博物館蔵）などと一致する。これらの点からは、大仙院室中襖絵の背景に東アジアの同時代的な文化潮流の影響を想定できる。

以上の検討を通じ、本発表では、大仙院室中襖絵について、足利将軍家障壁画の系譜に連なる縦軸と、同時代の朝鮮半島とも通じる東アジア的な横軸の両方から捉える新たな作品理解を示す。